

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19310160  
 研究課題名（和文） 日本と南アフリカにおけるリージョナル協力と国際人口移動  
 人間安全保障の展望  
 研究課題名（英文） Regional Cooperation and International Migration in and around Japan  
 and South Africa: Prospect of Human Security  
 研究代表者  
 佐藤 誠（SATO MAKOTO）  
 立命館大学・国際関係学部・教授  
 研究者番号：70205962

研究成果の概要（和文）： 国際人口移動を単なる労働移民の問題にとどまらない複合現象として理解する視点にたち、日本とアジア、南アフリカと南部アフリカという二地域における国際人口移動の実態把握と比較分析を通じて、流出地域と流入地域において人間の安全が保障されるための課題は何であるのかを、人間安全保障の批判的摂取をふまえて解明した。具体的には、社会セクターにおける人口移動に焦点をあて、国際人口移動研究への理論的貢献を行った。

研究成果の概要（英文）： This project explored how to protect human security both in sending and receiving countries by critically applying human security perspectives to current international migration. In this project, migration was comprehended not as a simple labour migration but as a total trans-border phenomenon, and migration in Japan-Asia and in South Africa-Southern Africa was analysed comparatively. The specific focus was set on social sector migration and the theories of international migration were re-examined.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	4,000,000 円	1,200,000 円	5,200,000 円
2008 年度	3,700,000 円	1,110,000 円	4,810,000 円
2009 年度	1,800,000 円	540,000 円	2,340,000 円
年度			
年度			
総計	9,500,000 円	2,850,000 円	12,350,000 円

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：国際人口移動、人間安全保障、地域間比較研究、南アフリカ、フィリピン、看護・医療労働、国際労働移動、介護・ケア労働

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、グローバル化の進む国際人口移動（international migration）が地域協力・統合の重要な構成要因であり、国際人口移動に対する政策的対応が地域レベルでの人間安全保障の強化に

有効であるという仮説にたつて、日本とアジア周辺国間、南アフリカ（南ア）と南部アフリカ周辺国間それぞれにおける国際人口移動の比較分析を行い、実態把握と理論構築を目指した。

それにより両地域およびグローバルな国

際人口移動の特質を明らかにして、流出地域と流入地域が共生し、ともに人間安全保障論のいう「欠乏からの自由」と「恐怖からの自由」が保障されるための課題を追求した。

(2) 日本と南アはいずれもリージョナルな経済的中心に位置し、周辺諸国との負の歴史的關係を乗り越えながら地域協力を進める課題に直面しているという共通性をもつ。また、越境的な人の移動に関しても周辺諸国との協力が要請されている点でも共通している。

(3) 日本の国際人口移動研究は、流入する外国人を「外国人労働者」として扱い、外国人の定住化の問題や市民権の問題として再考する必要性が高まっている。

(4) 他方、南アの国際人口移動研究も、鉱山などの部門における出稼ぎ労働を中心とした労働力移動に主眼がおかれているが、南アをめぐる国際人口移動は多様化しており、それに関する相対的な把握を試みた研究は存在しない。

(5) 本研究は、人間安全保障論からみた国際人口移動の実態把握と理論構築を目指した。国際人口移動において、移民は送り出し国からも受け入れ国からも十分な庇護を受けず、人権と安全を脅かされやすい。他方、人の移動に伴う感染症や武器、麻薬、貧困の拡散は定住者の安全を脅かす。それゆえ移民と国際人口移動にともなう安全への政策的対応は、「欠乏からの自由」「恐怖からの自由」「尊厳をもち生きる自由」を説く人間安全保障にとって象徴的な意味を持つ。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、国際人口移動を単なる労働移動の問題にとどまらない複合現象として理解する視点にたち、日本とアジア、南アフリカと南部アフリカという二地域における国際人口移動の実態把握と比較分析を通じて、移民と定住民共生のための課題は何であるのかを、人間安全保障の批判的摂取をふまえてつ解明することである。とくに非自発的移住、労働移動、国際結婚と市民権、所得と技術の移転—などに注目して、現地調査による実態把握と比較分析を行い、国際人口移動研究への新たな視角からの理論的貢献を目指した。

(1) 非自発的移住に関しては、人身売買など国際的な犯罪組織がかかわる事例だけでなく、移住そのものは自発的・合法的であっても、家事・ケア労働者が晒される暴力やハラ

スメントにも視点を広げて、市民社会組織が果たす役割、被害者のケア、送り出し国・受け入れ国の対応などについて、実態解明を目指した。

(2) 労働移動については、比較的新しい現象である介護・看護労働者に着目し、受け入れ国の保健医療面での人間安全保障が向上する一方で、送り出し国の医療水準が劣化し、そこに住む人々の人間安全保障が脅かされることになるという、人間安全保障のジレンマが起こりうることをどう把握するかという課題を検討した。

(3) 国際結婚と市民権に関しては、国際結婚・家族結合が長期滞在さらには定住の問題と深く結びついているため、とくに子どもの(学校)教育やアイデンティティ形成など次世代につながる問題に焦点をあて、実態把握を目指した。

(4) 所得・技術移転と開発に関しては、ディアスポラによる技術移転や所得移転が送り出し国と受け入れ国の開発といかに結びつき、「欠乏からの自由」を実現できるかという問いについて、主に医療・介護・教育などの社会セクター労働者を対象に、南ア、フィリピン、スリランカ人労働者などの事例を調べた。

## 3. 研究の方法

(1) 年に4回ほどの定例研究会を実施し、各研究分担者・協力者の担当分野で研究成果を報告し、議論を深めた。

(2) 日本国内において、中央政府関連省庁、関係自治体、経済・労働団体、在日外国人関連団体、教育機関、NGOなどを対象に、日本—フィリピン経済連携協定に基づくフィリピン人看護・介護労働者受け入れの現状を中心に、資料収集、聞き取り調査を実施した。

(3) フィリピンにおいては、マリア・パレスカス教授(フィリピン大学)などと意見交換を行いつつ、看護・介護労働者移出の現状について、フィリピン保健省、海外雇用庁、看護協会、看護学校講師などを対象に現地調査を実施した。

(4) フセイン・ソロモン教授(プレトリア大学政治学部)、スカーレット・コーネリッセン教授(ステレンボッシュ大学政治学部)を南ア側の研究協力者とし、意見交換ならびに研究成果の共同発表を行った。また、両者の協力を得て、南アの中央政府、地方(州)政府、経済・労働団体、NGOなどにたいする現地調査を実施した。

(5) 若手研究者養成の観点から大学院生2名を研究協力者として加え、各人は日本および南アでの現地調査や定例研究会への参加を通じてそれぞれの研究課題に取り組んだ。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究の主な成果

本研究では、最終的に、医療・福祉・教育などの社会セクターにおける国際人口移動を中心的な課題とし、日本—アジア諸国、南アフリカ—南部アフリカという二地域の比較分析を行うことで、移民労働を通じた社会的再生産の確保と人間安全保障が特定地域に限らないグローバルかつリージョナル(東アジアおよび南部アフリカ)な課題になっていることを明らかにした。

人間の生命的・社会的な再生産は人間安全保障の土台をなす。ところが、社会的再生産の中核をなす社会的セクターの担い手は、現在のグローバリゼーションのなかで急速に越境化しつつある。この現実に着目して越境化する社会セクター労働者の実態と課題を明らかにしたことは、これら移民労働者の人間安全保障だけではなく、彼(女)らを送り出す社会および受け入れる社会それぞれの人間安全保障にとって重要な意義をもつ。

##### (2) 本研究成果の日本国内における位置づけとインパクト

日本の場合、少子高齢化を背景とした介護と医療の需要拡大と現場を担う看護・介護労働者の不足は、介護・看護を必要とする住民とそれを担う労働者双方にとって解決を求められる切実な課題となっている。こうしたなかで日本は経済協力協定(EPA)に基づく外国人介護士・看護師の導入に踏み切り、2008年、その第一号としてインドネシアから実習生が来日した。その後、フィリピンからの実習生が続き、タイからの研修生の来日も予定されている。

本研究では、日本の現場ではどのように外国人労働者が受け入れられているのかを考察し、それにどう対応するべきかの方策についても検討した。さらに、日本へ労働者を送り出している国(フィリピン)においてはどのような問題が生じているのかについて、移動の結果と原因の双方を安全保障論の観点から分析した。

##### (3) 本研究成果の海外における位置づけとインパクト

社会セクターの人口移動に関しては、アジア、南部アフリカと比べて受け入れの規模・歴史ともに経験が豊富な欧米諸国から学ぶことも多い。本研究では、最終的な研究成果

の発表を目的とした国際カンファレンスを2009年10月に開催し、イギリス・リーズ大学地理学部のエイドリアン・ベイラー教授を招聘して、イギリスの社会セクターにおけるジンバブエ人移民労働者に関する研究成果を共有した。また、同カンファレンスでは、イギリスと日本からの研究者に加えて、南アフリカおよびフィリピンから招聘した研究者も研究報告を行い、地域間比較とグローバルな位置づけを検討した。

##### (4) 理論的深化への貢献

社会セクターに焦点をあてることで、人間安全保障と社会的再生産の関係への理論的な解明を試みた。そこでは、外国人介護士・看護師に対してどのように対処するかといった既存の研究に多くみられる現場の実態分析と実践的処方策に学びつつ、また、グローバル・ケア・チェーンなどの理論提起を受けつつ、社会セクター労働の越境化について国際比較を行うことで、ナショナル・リージョナル・グローバルなレベルで、国家・地域・国際機関、市民社会がどのように関与するのかにあつての考察を試みた。

本研究ではとくに、社会セクターの労働移動をグローバリゼーションの展開とともに進む再生産部門労働の越境的拡大の一環と捉え、再生産、国際労働移民、人間安全保障の関連について理論的考察を行った。その結果、安定的な再生産こそ人間の安全保障にとっての必要条件であり、移民労働者およびその家族だけでなく、送り出し社会、受け入れ社会という三つの場において安定的な再生産が保障されることが、恐怖からの自由・欠乏からの自由・尊厳をもち生きる自由として人間安全保障が実現されるということになるという結論を提出した。

##### (5) 今後の展望

###### ①書籍刊行

本研究の成果を社会的に還元するため、社会セクターにおける移民労働者に関して、イギリス、南部アフリカ、フィリピン、日本がそれぞれ抱える現状と課題をまとめ、2010年度中に単行本として刊行するべく、準備を進めている。

人間安全保障の観点から、社会的再生産の越境化が提起している問題を批判的に再検討し、さらに国際人口移動理論の変容を迫っている点を指摘し、理論的深化の貢献を目指す。

###### ②パートナーシップの継続

本研究で実施した現地調査や国際セミナーでの研究報告に協力してくれた海外共同研究者とは今後もパートナーシップを継続し、社会的再生産、人間安全保障、国際人口

移動といった研究課題について、国際的・比較的な視点から更に探究を重ねていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 佐藤千鶴子、「南アフリカ選挙とクワズールー・ナタール州」、『アフリカレポート』、49巻、2009年、pp. 40-45、査読有
- ② 鄭雅英/藤永壯/伊地知紀子/高正子/高村竜平/村上尚子、「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(7・上)(7・下)——玄礎 玖さんへのインタビュー記録——」、『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』、6・7巻、2009年、pp. 85-105 (6巻) pp. 115-137 (7巻)、査読有
- ③ 佐藤千鶴子、「医療労働者の国際移動と医療人的資源政策—南アフリカの事例」、『立命館国際地域研究』、29巻、2009年、pp. 13-32、査読有
- ④ Nakamura, Hisashi, 'Social Development and Conflict Resolution as seen by an Unorthodox Economist,' *Afrasia Working Paper*, No. 39, 2009, pp.1-121, 査読有
- ⑤ Mine, Yoichi, Manjurika Koshal et al., 'Changing Demographic Labor Force and Productivity: A Case of Japan,' *Perspectives on Global Development and Technology*, Vol.7 No.2, 2008, pp.175-187, 査読有
- ⑥ Shani, Giorgio, 'Towards a Post-Western IR: The Umma, Khalsa Panth and Critical International Theory,' *International Studies Review*, Vol.10 No.4, 2008, pp.722-734, 査読有
- ⑦ 藤永壯/高正子/伊地知紀子/鄭雅英/皇甫佳英/高村竜平/村上尚子/福元拓、「解放直後・在日済州島出身者の生活史調査(5)——高蘭 姫さんへのインタビュー記録」、『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』、2巻、2008年、pp. 105-128、査読有
- ⑧ Shani, Giorgio, 'Provincialising Critical Theory: Islam, Sikhism and International Relations,' *Cambridge Review of International Affairs*, Vol.20 No.3, 2007, pp.417-434, 査読有
- ⑨ Sato, Chizuko, 'Liberal Opposition to

Forced Removals and Non-racialism in South Africa,' *Ritsumeikan Annual Review of International Studies*, Vol.6, 2007, pp.79-102, 査読有

[学会発表] (計7件)

- ① Carlos, Maria Reinaruth D., 'Filipino Careworkers in Ageing Japan: Trends, Trajectories and Policies,' *APPAM International Conference "Migration: A World in Motion"*, 19 February, 2010, Maastricht, Netherland.
- ② Mine, Yoichi, 'Human Development and Security,' *International Workshops on Learning and Teaching Human Security Studies*, 14 December, 2009, Asian Research Center for Migration, Institute of Asian Studies, and M.A. in International Development Studies, Faculty of Political Science, Chulalongkorn University, Thailand.
- ③ 安藤次男「政治・経済・文化の交錯する日米関係」『国際シンポジウム「グローバル化時代における東アジアの制度変革」』2009年9月13-14日、南開大学、天津、中国。
- ④ Shani, Giorgio, 'The Memorialization of Ghallughara: 1984, Nation and Diaspora,' *International conference "After 1984? Sikhs and the Memory of Politics"*, 12-13 September, 2009, University of California, Berkeley, USA.
- ⑤ 鄭雅英「在日同胞社会と韓国四月革命—韓国国民台形学生青年運動を中心に(韓国語)」『国際高麗学会第9回コリア学国際学術討論会』2009年8月29日、復旦大学、上海、中国。
- ⑥ Carlos, Maria Reinaruth D., 'Japan's Acceptance of Foreign Careworkers within Economic Partnership Agreements (EPAs): The Cases of Indonesia and the Philippines,' *International Conference of Asia Scholars (ICAS)*, 6 August, 2009, Daejeon, South Korea.
- ⑦ Mine, Yoichi, 'The Ambiguity of Development: From a Japanese Perspective,' *International Conference "Reframing Development: Post-development, Globalization, and the Human Condition"*, 8-10 April, 2009, Osaka University.

[図書] (計22件)

- ① 武者小路公秀編著『人間の安全保障—国

家中心主義を超えて』ミネルヴァ書房、2009年、328 ページ

② 峯陽一『南アフリカの歴史(最新版)』(レナード・トンプソン) 明石書店、2009年、701 ページ、(共訳、改訳・改訂および「最新版への付記」を担当)。

③ 文京洙・川瀬俊治共編『ろうそくデモを超えて—韓国社会はどこに向かってるか』東方出版、2009年、367 ページ。

④ Carlos, Maria Reinaruth D., Caragay, Ruben C. and Uyar, Aysun, *Proceedings of the 2nd Philippines-Japan Conference on Migration, "The Migration of Filipino Careworkers to Japan Under the JPEPA: Learning from the Indonesian Experience and Initial Responses of the Philippine Society"*, 龍谷大学アフラシア平和開発研究センター (Afrasian Research Series, No.10), 2009, 65pages.

⑤ Shani, Giogio, *Routledge Handbook of Religion and Politics*. Routledge, 2009, 432pages, (A chapter contribution: 'Religious Transnational Actors and World Politics).

⑥ Carlos, Maria Reinaruth D. and Sato, Chizuko, eds. *Philippines-Japan Conference on Migration Proceedings, "The Migration of Health Care Workers from the Philippines: Japan as a Potential Host Country for Nurses and Caregivers" March 25, 2008*, 龍谷大学アフラシア平和開発研究センター、2009年、104 ページ。

⑦ 佐藤千鶴子『南アフリカの土地改革』日本経済評論社、2009年、252 ページ。

⑧ 佐藤千鶴子、マリア・レイナルース・D・カルロス『フィリピン人介護士受け入れ戦略—アメリカ、シンガポールからの教訓—さあ、日本はどうする? (2007年7月14日)』龍谷大学アフラシア平和開発研究センター、2008年、114 ページ、(共著、「フィリピン人看護師の国際移動の現状と政策的枠組み」担当)。

⑨ 文京洙『濟州島四・三事件—島(タムナ)の国の死と再生の物語』平凡社、2008年、254 ページ。

⑩ 鄭雅英『中国の改革解放 30年の明暗—とける国境、ゆらぐ国内』世界思想社、2008年、256 ページ (共著、「朝鮮族教育と民族自治」担当)。

⑪ 佐藤誠『非営利・協同システムの展開』日本経済新聞社、2008年、298 ページ (共著、「社会的経済と企業の社会的責任」担当)。

⑫ 峯陽一『戦争と平和の間—紛争勃発後のアフリカと国際社会』アジア経済研究所、2008年、400 ページ (共著、「ウガンダ 1986、南アフリカ 1994—紛争後の包括的政治体制の比較分析」担当)。

⑬ Shani, Giorgio, Sato, Makoto and Pasha, M.K., eds. *Protecting Human Security in a Post 9/11 World: Critical and Global Insights*. Palgrave Macmillan, 2007, 226 pages.

⑭ Mine, Yoichi, *Protecting Human Security in a Post 9/11 World: Critical and Global Insights*. Palgrave Macmillan, 2007, 226 pages, (A chapter contribution: 'Downside Risks and Human Security').

⑮ Shani, Giorgio, *Sikh Nationalism and Identity in a Global Age*. Routledge, 2007, 224pages.

⑯ 佐藤誠『成長するアフリカ—日本と中国の視点(報告集)』アジア経済研究所、2007年、ウェブ公開、(共著)。

⑰ 峯陽一『人間の安全保障—貧困削減の新しい視点』国際協力出版会、2007年、274 ページ、(共著、「アマルティア・センと人間の安全保障」担当)。

⑱ 中村尚司『介護・家事労働者の国際移動—エスニシティ・ジェンダー・ケア労働の交差』2007年、250 ページ、(共著、「介護・家事労働者の送り出し国がかかえる問題」担当)。

⑲ 中村尚司『経済思想 非西欧圏の経済学』第11巻、2007年、338 ページ、(共著、「土着・伝統的思想と経済学—アジアの古典から学ぶ経済システムの展望」担当)。

⑳ 文京洙『在日外国人の住民自治：川崎と京都から考える』新幹社、2007年、205 ページ、(共著)。

㉑ 小島祥美『外国人・民族的マイノリティ人権白書』明石書店、2007年、296 ページ、(共著、「『不就学』の外国籍の子供たち」担当)。

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

佐藤 誠 (SATO MAKOTO)  
立命館大学・国際関係学部・教授  
研究者番号：70205962

### (2)研究分担者

峯 陽一 (MINE YOUICHI)  
大阪大学・グローバル・コラボレーション・センター・准教授  
研究者番号：30257589

文 京洙 (MUN GYONSU)  
立命館大学・国際関係学部・教授  
研究者番号：70230026

シヤーンニー ジョルジオ(SHANI GIORGIO)  
国際基督教大学・社会科学研究所・准教授  
研究者番号：60351318

カルロス マリア・レイナルース (CARLOS MARIA REINARUTH)  
龍谷大学・国際文化学部・准教授  
研究者番号：90335414

中村 尚司 (NAKAMURA HISASHI)  
龍谷大学・人間科学宗教総合研究センター・研究員  
研究者番号：50172424

鄭 雅英 (CHUNG AH YOUNG)  
立命館大学・経営学部・准教授  
研究者番号：90434703

佐藤 千鶴子 (SATO CHIZUKO)  
独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・研究員  
研究者番号：40425012

安藤 次男 (ANDO TSUGIO)  
立命館大学・国際関係学部・特任教授  
研究者番号：50066726

小島 祥美 (KOJIMA YOSHIMI)  
愛知淑徳大学・コミュニティコラボレーションセンター・講師  
研究者番号：10449473

大倉 三和 (OKURA MIWA)  
立命館大学・国際関係学部・准教授  
研究者番号：30425011

### (4)研究協力者

海外研究協力者：  
スコーマン、マキシ (南ア、プレトリア大学

政治学部教授、学部長) (SCHOEMAN, MAXI)

ソロモン、フセイン (南ア、プレトリア大学政治学部教授) (SOLOMON, HUSSEIN)

コーネリッセン、スカーレット (南ア、ステレンボッシュ大学政治学部教授) (CORNELISSEN, SCARLETT)

バレスカス、マリア・ロザリオ (フィリピン、フィリピン大学セブ校教授) (PIQUERO-BALLESCAS, MARIA ROSARIO)

ベイリー、エイドリアン (イギリス、リーズ大学地理学部教授) (BAILEY, ADRIAN)

アティエンサ、マリア・エラ (フィリピン、フィリピン大学政治学部准教授) (ATIENZA, MARIA ELA)

ハートウェル、レオン (南ア、プレトリア大学政治学部) (HARTWELL, LEON)

デヤヘル、ニコラ (南ア、ステレンボッシュ大学政治学部) (DE JAGER, NICOLA)

若手研究協力者：  
大西 裕子 (立命館大学大学院国際関係研究科博士後期課程) (ONISHI YUKO)

坂田 有弥 (大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程) (SAKATA YUMI)